

伝統芸能の次世代への継承

私は幼少のころからお箏という日本の伝統楽器を学んできた。はじめは一趣味であった箏だが、小学 3 年生のころから自作自演の作品で全国コンクールに出場するという挑戦をし、それをきっかけに私は真摯に箏と向かい合うようになった。今では箏は私の一部である。

邦楽という日本の伝統芸能は、世界に誇れる素晴らしい文化であると考えている。しかし現在邦楽界は活気がなく、関係者の人口も減る一方であるという。それはなぜなのか。また、未来へと伝え残し今後ますます発展させていくにはどうすればいいのか。このような思いのもとに、研究を行った結果そして考察を論文としてここにおさめたい。

ただ、一口に伝統芸能の次世代への継承をめざすとは言っても、そこにはいくつもの大きな壁が存在する。それは何かというと、現在邦楽界の抱える問題・そして「伝統」の抱える本質的な要素としての課題である。以下に、具体的に例を述べ考えてみたい。

まずは、現在邦楽界の抱える問題、2 点についてである。

最も重大な課題は赤字問題である。現在の邦楽器店はほとんどすべてが赤字という。2007 年ごろから大手の店々が億単位の負債をかかえて倒産しているようだ。邦楽器店といっても製造、問屋、小売とあるだろうが何処も景気の良いわけはなく 10 年位前から日本中で毎年数件ずつ倒産しているという。残った数少ない店のなかでもヤマハ株式会社や全音楽譜出版社に売って利益を得ているのはほんの一握りだそうだ。

次に、後継者についての問題である。現在邦楽をはじめとする伝統芸能人口は年々減少の道をたどっている。経産省データによれば 1990 時と比べ 15 年後の 2005 年は尺八人口がおよそ 3 分の 1 になった。また 2011 年現在で平家琵琶の演奏者数はたったの 11 人で、そのなかで本当に

真髓を受け継いでいる盲目の演奏者は 1 人きりだという。

最後に、伝統の抱える本質的な問題について述べたい。それは、「伝統は時代に影響される」ということだ。これは、時代の風潮や背景に文化としての伝統文化が大きく影響を受け、活性へも衰退へも移りゆくということ。

雅楽は平安のころに約 100 年かけて大成されたものである。だから 1200 年近くの歴史を持っている。宮廷の力が落ちた時には衰え、復興した時には盛んになりと、音楽文化は世相と政治事情に大きく影響されるということが、確認できる。また三味線は、当時は犬皮はなく、猫皮だけだったようで、5 代将軍綱吉の時の「生類憐みの令」により三味線がどうなったかの資料は残っていないそうだが、かなり打撃を受けたことは明白であろうと考えられる。太平洋戦争に負けてからの 10 年間は国力に余裕がない上、アメリカからマッカーサー達と共にジャズミュージックがどんどん入ってきたため、従来の文化よりもそちらのほうに関心に移り廃れてしまった。その後 1969～1970 年代にかけ、物品や技術など進んだ文化を取り入れようとして大きく成長する高度経済成長へと日本は突入し、これに比例するように女の子のお稽古ごとくも「お箏→ピアノ」へと移り変わっていった。やはりこれも、世相や政治の事情に影響を受ける一例といえるのではないだろうか。

しかしこうした幾多の課題をも克服できる一つの糸口がある。それは、音楽として文化として、現代人一人ひとりの心にその良さ・素晴らしさを伝えていくこと。言い換えれば、「保存」でなく「継承」。時代に合うよう発展させていくことだ。また、音楽は人の心を動かす最後の砦という言葉もある。政府の支援や振興政策がすべてそろったとしても、それに人々の心が伴わなければ伝統は廃れる一方だがその中で極めつけの砦である

「心」がそろえば、どんな試練があろうとも伝統は確かに伝わっていくものである。それは簡単に言うと、伝統芸能を面白いと感じる心、先人達が作ったものを残した

いと思い、伝統の真髓を悟る心である。京都の祇園祭も、これと類似する民衆心理への働きかけによって、その継承を続けてきた例がある。

では邦楽では具体的にどう改善してゆけばよいのだろうか。ここで私の作品をとって例示しながら話を進めたい。

音楽の 3 要素に一般に「リズム・メロディー・ハーモニー」がある。これを邦楽曲に取り入れることによって、『茜色の雪』では音楽として現代人に耳なじみがよいよう工夫した。しかし、忘れてはならない「伝統の真髓」の要素も含め、和楽の 3 要素である「間・気・和」も、曲中に奏法やリズムの一つとして取り入れた。また、『舞花』では、スピード化する現代のリズムを迎え、従来の 20～40 分の箏曲を 4 分に短縮して作曲し、その中に伝えたい音楽性、真髓、エッセンスを凝縮した。この『舞花』は数々の賞を戴き、一般の方々にも幅広く受け入れていただいている。また、『おつきみ☆こうさぎ』では、テンポの良いリズムカルな曲にし、斬新な、自作物語の一部とした曲である。

こうして、「保存」ではなく「継承」。時代に合うよう発展させていき、現代の人々の心に響く「伝統文化」と変えていくことにより、先に述べた課題は克服の糸口が見えるのではなかろうか。興味を持ち、邦楽に関わる人口が増えれば、必然的に製造会社はうるおい、後継者不足も補える。これは一例である。

邦楽という日本の伝統芸能は、世界に誇れる素晴らしい文化であると考えます。この邦楽を、そして日本を我が国の現代人に愛してもらえれば、これほど嬉しいことはない。